



海のボクサー

キンチャクガニ

今回ご紹介する生き物は、これまで探してもなかなか見つけることができなかった「キンチャクガニ」です。

キンチャクガニは、甲らの幅が1~1.5cmほどの小さなカニですが、甲らや脚の様相があざやかなので、すぐにわかります。図鑑などに載っている写真は、岩の上にいる姿ばかりで、人からも「岩やがれきのすき間にすんでいる」と聞いていたので、ずっとそういうところを探していました。でも、見つけることができたのは、この7年間で3個体だけでした。せっかく見つけたキンチャクガニも、すぐに横走り（かんさつ）で逃げていってしまい、ゆっくり観察する間もありませんでした。

ところが今年になって、別の調査の最中にアナサンゴモドキの枝の間にいるのを、偶然見つけました。それで、同じようなアナサンゴモドキの枝のすき間を注意深く探してみたところ、1回の調査で7個体のキンチャクガニを見ることができ

たのです。その後も、3回調査して合計24個体を見つめることができました。ただし、採集（さいしゅう）するのは大変です。驚いた（おどろ）キンチャクガニは、アナサンゴモドキの枝の奥へかくれるので、曲げた針金などで枝の奥から少しずつ表に追い出さなくてはなりません。そして、それはほとんどうまくいかず、逃げられてしまいます。

ところで、なぜこのキンチャクガニを探していたかということ、このキンチャクガニとその2本のはさみにつけているイソギンチャクとの関係に興味があったからです。2mmくらいの小さく白いイソギンチャクで、その名もカニハサミイソギンチャクといいます。キンチャクガニは、



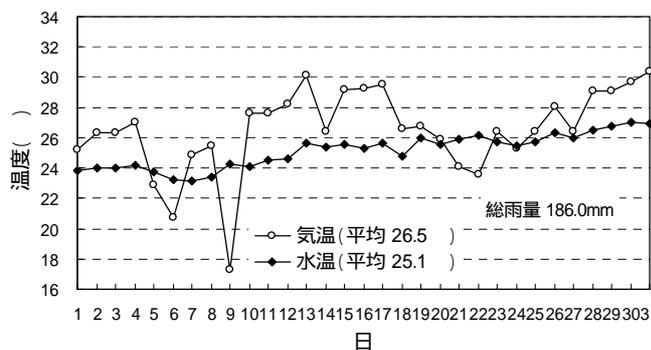
写真1 はさみにはさまれたイソギンチャク

イソギンチャクがもっている刺胞（しほう）（毒針）で、敵から身を守っていると言われている。

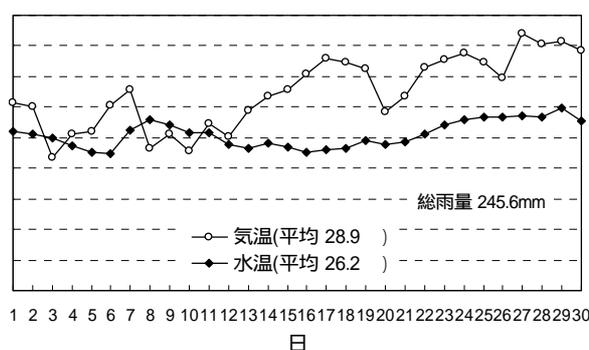
なるほど、針金で追い出そうとすると、はさみのイソギンチャクを振り上げて、威嚇（いかく）してきます。その姿がボクシングをしているように見えることから、キンチャクガニは、英語で「ボクサー・クラブ」（ボクサーのカニ）と呼ばれます（そのわりにすぐに逃げていきますが）。ようやく採集（さいしゅう）したキンチャクガニを研究所の顕微鏡（けんびきょう）で観

定点観測

2004年5月



2004年6月



察してみると、イソギンチャクは、カニのはさみにくっついてはいるのではなく、はさみではさまれていました(写真1)。イソギンチャクをはさんでいると、カニはうまく餌を食べられないはずですが、どうしているのでしょうか。日本の研究者によって、イソギンチャクを一時的にはなして食事をしているところが水槽の中で観察されているようですが、海の中では見られておらず、まだはっきりしません。また、今年見た24個体のキンチャクガニは、すべてこのイソギンチャクを持っていましたが、海の中でイソギンチャクだけが見つかったことはありません。イソギンチャクが小さすぎて、見つけれないだけなのか、キンチャクガニが、特別な見つけかたや手に入れる方法を知っているのか、この小さなカニとイソギンチャクたちについては、まだまだ不思議なことだらけです。

阿嘉島の海より

6月28日~7月2日、宜野湾の沖縄コンベンションセンターで第10回国際サンゴ礁シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは4年に1度、世界中のサンゴ礁研究者が一同に会して開催されるサンゴ礁の国際学会です。それが今回は日本の沖縄を開催地として開かれました。今回のシンポジウムには世界中から1300人以上の研究者が参加し、盛大な会議となりました。阿嘉島臨海研究所から

も岩尾研究員、谷口研究員が研究の成果を発表し、大森所長は会議の進行役を務めるなどしました。

期間中の6月30日に開催された公開シンポジウムでは、阿嘉島から照喜名定盛



さん(元阿嘉小中学校校長)と金城忠彦さん(座間味村漁協組合長)がパネルディスカッションにパネラーとして参加し、垣花薫さん(あか・げるまダイビング協会会長)は座間味のサンゴ礁保全活動



について発表しました。

シンポジウム閉会後も30人ほどの海外の研究者が阿嘉島を訪れてダイビングやシュノーケリングを楽しみ、みな美しいサンゴ礁に感動して帰って行きました。

今回のシンポジウムで慶良間のサンゴ礁は世界中のサンゴ礁研究者の注目を集めることになりました。この美しく貴重な慶良間のサンゴ礁をいつまでも失わないように、みんなで協力していきましょう。